

ワセダから、地球へ

早稲田大学環境・安全報告書

2005—06



環境への取組み



目 次

環境報告書ガイドライン対応項目

●総長より「地球環境保全に資する人材の育成と研究の推進をめざして」	P-1	1)経営責任者の緒言
●早稲田大学の概要	P-2	2)報告に当たっての基本的要件
		3)事業の概況
●特集！学生の環境保全活動① リユース弁当箱プロジェクト	P-4	
●特集！学生の環境保全活動② 早稲田ごみ革命	P-6	
●特集！学生の環境保全活動③ 高等学院環境委員会の活動	P-7	
●その他の学生の活動	P-8	
●環境保全活動＋ボランティア＋大学＝もっと未来へ！	P-9	
●エコフューチャー学生教職員懇談会	P-10	
●地域と共に		
●環境関連授業	P-11	
●環境関連教員・研究	P-12	
●地球環境問題談話会	P-13	
●キャンパスと自然		
●化学物質管理	P-14	18)化学物質排出量・移動量及びその低減対策
●水質管理	P-15	
●地球温暖化低減、省エネルギーに関する取組み		
●環境宣言	P-16	4)事業活動における環境配慮の方針
●環境マネジメントシステム	P-17	8)環境マネジメントシステムの状況
●2005年度環境目標と達成状況・2006年度環境目標		5)事業活動への環境配慮の取組に関する目標、計画及び実績等の総括
		6)事業活動のマテリアルバランス
		14)総エネルギー投入量及びその低減対策
		16)水資源投入量及びその低減対策
		17)温室効果ガス排出量及びその低減対策
		20)廃棄物等総排出量、廃棄物最終処分量及びその低減対策
		21)総排水量及びその低減対策
●環境負荷データ	P-18	
●環境保全活動の歩み	P-20	
●環境に関するコミュニケーション		11)環境情報開示、環境コミュニケーションの状況
●吹付けアスベスト対策	P-22	
●シックハウス対策	P-23	
●化学物質の安全管理	P-24	
●実験系の安全管理		
●PCBの管理	P-25	
●防火・救命の体制		
●地震対策	P-26	
●キャンパスセキュリティ	P-27	
●安全衛生管理体制		
●ステークホルダーからのご意見	P-28	

安全への取組み



ワセダから、地球へ

早稲田大学環境・安全報告書 2005—06



地球環境保全に資する人材の育成と研究の推進をめざして

私たちは今、これまで人類が経験したことのない転換期を迎えています。地球規模の環境問題は21世紀における人類最大の課題とさえいわれ、国内外を問わず様々な主体によって積極的な取り組みが行われています。その中で、環境保全のために行動する人づくりにおいては、高等教育が担う役割は更に重要性を増しています。

早稲田大学は、創設者大隈重信の建学の精神である「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」を踏まえ、環境に関する活動方針である「環境宣言」を1999年に定め、人類の未来を左右する地球規模の問題解決に努めてきました。

早稲田大学の教育・研究活動が環境に与える負の影響として、地球温暖化物質の排出、廃棄物の排出、化学物質使用などが挙げられます。われわれはそれらの低減を継続的に実践し、省エネルギーや廃棄物量の削減に成果を挙げるとともに、全学的な化学物質管理体制の整備を推進してきました。

一方、良い影響としては、次代を担う人材育成と様々な学問領域の研究があります。これらは大学特有のものであり、その活動は無限の可能性を秘めているといえます。

特に最近では、環境保全活動とボランティアを結びつけた「環境ボランティア」に注力し、学生の自主性を尊重した多様な活動を展開しています。

さらに、これからの時代を担う学生にとって、環境に関する知識や見識は、最低限必要なものと考え、すべての学部学生が履修可能な環境関連科目をオープン教育センターに設置して、環境教育の充実を図っています。

研究面では、プロジェクト研究所の制度を整備した結果、様々な専門領域の研究者が特定のテーマに取り組むことで、多様性と総合性を有した先端的な研究が可能となり、環境分野の研究も盛んに行われています。2007年4月には環境・エネルギー分野の大学院を新設し、この分野での教育・研究の一層の進展をめざします。

早稲田大学は2007年10月に創立125周年を迎え、この節目を「第二の建学」と位置付けています。その歴史の中で、様々な分野で時代を切り拓いた先達の努力を今一度顧み、われわれの前に広がる未来にむかって果敢に挑戦し、人類の幸福に資する人材の育成と知の活用に全力で取り組むことを期するものであります。

早稲田大学 総長

白井寛孝



早稲田大学の概要

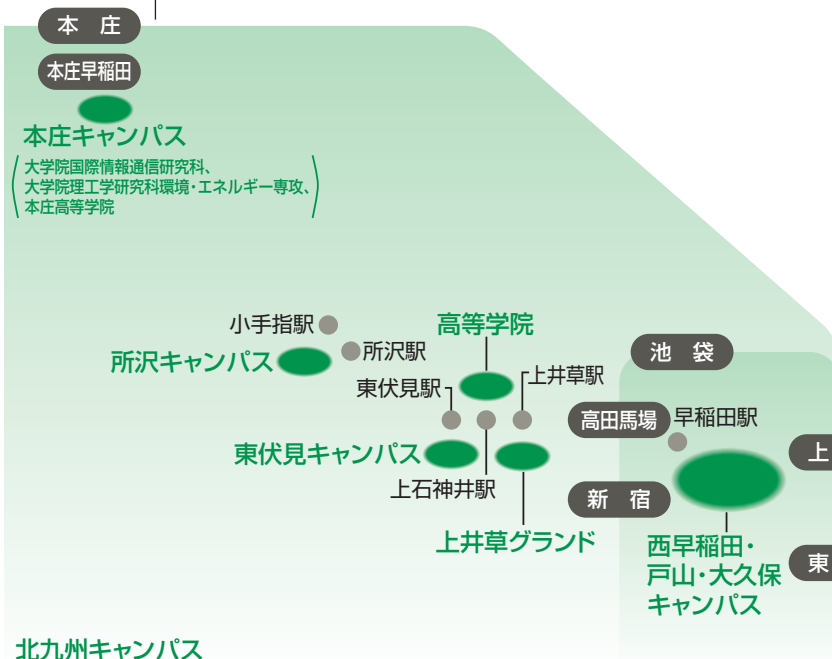
【名 称】 学校法人早稲田大学
 【創 立】 1882年
 【事業の概況】 大学および高等学校の経営、教育および研究

【早稲田大学教旨】

早稲田大学は学問の独立を全うし 学問の活用を効し
 模範国民を造就するを以て建学の本旨と為す
 早稲田大学は学問の独立を本旨と為すを以て
 之が自由討究を主とし
 常に独創の研鑽に力め以て
 世界の学問に裨補せん事を期す
 早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て
 学理を学理として研究すると共に
 之を實際に応用するの道を講し以て
 時世の進運に資せん事を期す
 早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て
 個性を尊重し 身家を発達し 国家社会を利済し
 併せて広く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す



拠点・キャンパス



【大 学 院】 18
 【学 部】 11
 【学 校】 4
 【そ の 他】 別科日本語専修課程

【学 生 数】 57,009名
 【専 任 教 員】 1,664名
 【専任扱い客員教授等】 331名
 【非常勤教員】 3,492名
 【専 任 職 員】 755名
 【専任以外職員】 131名

【帰 属 収 入】 約947億円
 【土 地 面 積】 約210万平方メートル
 【建 物 面 積】 約58万平方メートル

【対象期間】 定量的なデータは2005年4月1日～2006年3月31日の期間を掲載しました。
 環境保全活動の実績などは2006年7月までの活動を掲載しました。

【報告書作成にあたり参考とした法規制・ガイドライン等】
 「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」、環境報告書ガイドライン(2003年度版)



早稲田大学の環境への取組み

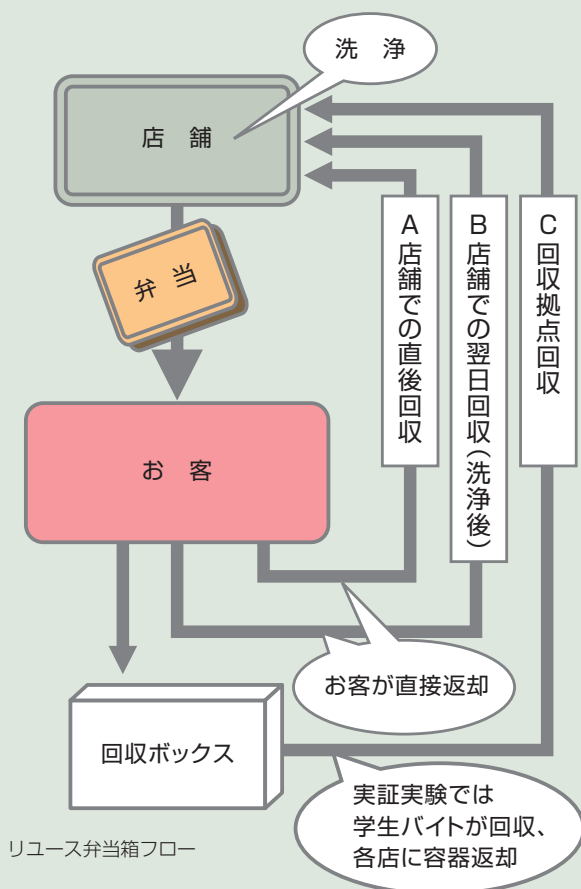
リユース弁当箱プロジェクトとは…

大学から排出される一般廃棄物は年間約2,300t、処理費用は約5,500万円です。

大学の不燃ごみの多くが、弁当容器のごみだと推定されています。この使い捨ての弁当容器をリユースできるものにしてみようというのがリユース弁当箱プロジェクトです。プロジェクトスタッフが用意した弁当容器を大学周辺商店街の弁当屋さんに配付→弁当を食べ終わったらキャンパスに設置した回収箱に入れる→プロジェクトスタッフが弁当容器を回収し、弁当屋さんに配付するというしくみになっています。

実施されたのは2005年ですが、最終報告書が2006年5月にまとまりました。

参考URL <http://www.reuse-lb.com/>



リユース弁当箱プロジェクト

リユース弁当箱プロジェクトを立ち上げた商学部3年の
洪^{ホン} 仙^{ソニ}希さんにお話を伺いました。

インタビュアー(以下、イ)：早稲田大学にはリサイクル弁当容器ホッかる(環境サークル「環境ロドリゲス」が開発した紙製の弁当容器で、使用後、紙としてリサイクルできる)が普及しているのですが、洪さんが弁当容器のリユースに着目した理由をおきかせください。

洪：ホッかるは弁当箱の中に仕切りができなくて、井ものしかできないというのが理由のひとつです。もうひとつはホッかるは容器のコストが高くて、早稲田大学生活協同組合は協力してくださるのですが、一般のお弁当屋さんには負担になってしまうのです。

イ：企画段階、実行段階でたいへんだったことは何でしたか？

洪：弁当箱を回収して、配るという毎日の運営がたいへんでした。協力してくれるスタッフもいるのですが、毎日のことで、しかもボランティアとなると予想以上にたいへんでした。

それからお弁当屋さんには弁当箱を洗わなければならない、それが普段の仕事に加わるわけですからたいへんだったと思います。



洪さん

PROJECT:RE



イ：利用者の反応や企画の手ごたえについてはどうでしょう？

洪：利用者側のニーズは確実にあると思います。もっと利用してもらうために、協力してくれるお弁当屋さんのPRをすればよかった。また、わたしがプロジェクトを企画し、実行するという経験が初めてのことで、慣れていないこともあり、プランを何度も変更したり、実施期間を変更したのですが、それがなければ利用者をもっと多かったと思います。

イ：協力してくださったお弁当屋さんは5店舗でしたが、チェーン店の協力はどうでしたか？

洪：お願いにいったのですが、各店舗レベルで判断できないということでご協力いただけませんでした。

イ：プロジェクトを継続するために必要なことは何でしょう？

洪：弁当容器の購入や印刷などの費用は早稲田大学環境総合研究センターの研究費で、運営スタッフはボランティアに頼りました。継続していくためにはこれらを賄う資金が必要です。このプロジェクトにより恩恵を受ける大学などが費用負担する必要があります。また、一部のお弁当屋さんだけが協力している状態では不十分で、地域全体を対象としたひとつのシステムとして成立させる必要があると思います。

キャンパスでの回収



RE-USE LUNCHBOX

リユース弁当箱プロジェクト実績報告（最終報告）

実施報告期間 10月11日～11月6日（実質21日間）

弁当箱使用数 631 個

ごみの消費量 11.358 Kg ※1

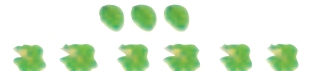
ごみ袋の数にすると 21.0 袋 ※1



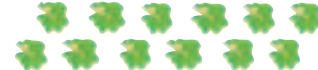
二酸化炭素削減量 46.65 Kg ※2

一年間の二酸化炭素の吸収量で算出すると ※3

葉っぱ 3本



枝 18本



小さな木 5本



大きな木 1本



上記は以下の想定の下に計算し、理解しやすいように数字で簡易に表現したものです。

※1 お弁当箱の重さは一つ18gと仮定し、一つのごみ袋に30個入るとして計算している。

※2 お弁当箱の素材をポリスチレンのものとし、二酸化炭素の削減量は早稲田大学永田研究室の

開発するLCAの指標であるELPIにより算出した。

※3 樹冠面積1㎡の木は1年間に約1.8Kgの二酸化炭素を吸収すると仮定している。以下に表示イメージの凡例を示す。なお、この算出は早稲田大学人間科学部 森川靖教授の監修のもと行った。

葉っぱ	枝	小さい木	大きい木	森
長さ約10cm×5 の葉っぱ1枚の 面積が50cm ² で 吸収量 9g	この葉が10枚 集まった枝とする 面積が500cm ² で 吸収量 90g	樹冠の面積が 1m ² の 小さな木では 吸収量 1.8kg	樹冠の面積が 20m ² の 大きな木では 吸収量 36kg	木々が集まった 林冠の面積が 100m ² の森では 吸収量 180kg

リユース弁当箱プロジェクト



リユース弁当箱プロジェクト協力店



早稲田ごみ革命

「早稲田ごみ革命」は学生による早稲田大学のごみ問題を改善することを目的としたプロジェクトで、2002年から続いています。

大学のごみのうちリサイクルされているのは約46%。可燃ごみや不燃ごみのごみ箱には、きちんと分別すればリサイクルできるものが混ざっています。

ごみ箱に捨てる段階で分別が徹底できれば、リサイクル量が増え、最終処分場に埋め立てるごみの量が減少します。

では、多くの学生に分別を徹底してもらうにはどうすればいいか？ごみ箱がもっと分別しやすければいいのでは？

「早稲田ごみ革命」は手始めに分別しやすいごみ箱を開発することになりました。開発にあたっては、学生、清掃担当者、大学担当者、ごみ箱メーカーが集まり、使う側、買う側、作る側それぞれの立場で検証を行い、「エコ貯金箱」(分別しやすいごみ箱)を完成させました。

現在、「早稲田ごみ革命」を行っている理工学部2年の夏井啓佑^{ナツイ ケイスケ}さんにこのプロジェクトの経緯についてお話を伺いました。



夏井さん

インタビュアー(以下、イ):「エコ貯金箱」開発の過程でたいへんだったことは何でしょうか？

夏井: 実際開発に携わっていたのはぼく先輩なんですが、せっかく学生がやるのだから、学生ならではの方法をとってみたいと考えたと聞いています。データをとって、科学的に根拠のあるものにしようというところがこだわりです。

データをとるというのは、ごみ箱の中のものを大きなシートに広げて、ひとつひとつ分別して、重さを量ります。そういう作業はたいへんです。

イ: いろいろなごみ箱の試作を行ってデータをとったのですよね？

夏井: そうですね。ごみ箱の高さ、色、投入口の形状など条件を変えて、捨てられたごみの分別状況のデータをとったようです。ごみ箱メーカーは安全性、耐久性、コストを考慮して開発していますが、分別しやすさについてのデータをとったことはないとのことでした。ぼくたちのデータはごみ箱を開発する上で参考になるということでした。

イ: みんなで開発したごみ箱が設置された感想は？

夏井: やはり分別しやすいと思います。ごみ箱の分別状況の調査はその後も継続していますが、10%以上は改善しています。

ただ、現在は屋内用ごみ箱に限られた建物にしか設置されていません。今後は、すべてのキャンパスのすべての建物に「エコ貯金箱」を設置したいですね。それから屋外用のごみ箱もモデルをCGで開発しているので、ぜひこれを設置したいです。

それから今後はごみ箱にこだわらず、大学のごみ問題を改善していくという視点から、もう少し広がりのある活動をしていきたいと思います。



屋内用「エコ貯金箱」

環境プロジェクトとは・・・

環境についてさまざまな視点から考え、身近なところから変えていこうとする団体で、部活でも、同好会でも、委員会でもない早稲田大学高等学院公認の団体です。現在メンバーは18名。その中で積極的に活動している高等学院 ^{ショウジ ヨウ}東海林 祐さん（環境プロジェクト代表）、^{タチツトム}館 努さん（高校生環境連盟代表）、^{イイダ タカヤ}飯田 貴也さん（早稲田大学高等学院自治委員長）に環境プロジェクトの活動についてお話を伺いました。

インタビュアー(以下、イ)：環境プロジェクトの活動の概要について教えてください。

東海林：ひとつは学院祭（高等学院の学園祭）で、「非木材紙容器」を導入しました。「非木材紙容器」はサトウキビの搾りかす・アシ・バガス・竹など木材を使っていない紙を原料にした容器です。使用後土に埋めると土に還ります。また学院祭でエコステーションを設置し、分別の徹底をしました。二つ目は地域清掃。三つ目は高校生環境連盟という組織を設立し、その中心的なメンバーとして活動しています。高校生環境連盟では、環境フォーラムを開催し、日頃の取り組みや、研究成果の発表、ディスカッションなどを行っています。環境フォーラムでは「打ち水」「スカベンジ（ごみ拾い）」を行っています。四つ目は練馬区「子どもとおとなの環境会議」への出席など学外の様々な催し物に参加しています。

イ：いろいろなことに取り組んでいますね。「非木材紙容器」の分解のようすはどうですか？

東海林：定期的に掘り返して、観察しています。分解のプロセスを論文にしたところ、高等学院のコンクールで銀賞をいただきました。また、地質学会高校生の部で優秀賞をいただきました。



高等学院環境委員会の活動



環境プロジェクト総会

イ：それは高い評価ですね。ただ活動をしただけでなく論文としてまとめることに意義がありますね。その他の活動についてなのですが、地域清掃はどのようなものなのですか？

飯田：学院生・教員・父母・商店街の方で協力して、駅から学院までを清掃しています。

イ：「子どもとおとなの環境会議」とはどのような会ですか？

館：練馬区の学校や企業などが集まり、それぞれの環境活動を報告しました。中には幼稚園の発表もあったりして、幅広い世代、さまざまな立場からの報告を聴くことができて、とても刺激を受けました。

イ：今後やっていきたいことはどのようなことですか？

館：高校生環境連盟の参加校が増えて、活動の輪が広がるといいですね。

飯田：環境マネジメントシステムにも取り組んでみたいです。

東海林：学院のごみ箱の整備や節水活動にも取り組みたいです。



その他の学生の活動

早稲田大学には5万人以上の学生と多くの学生サークルがあります。こうした学生のパワーが環境に向けられるとどうなるでしょう？

例えば、早稲田大学の学園祭「早稲田祭」では、学園祭によって出るごみの減量とリサイクルに努めています。

ホッかるは学生サークルが開発したリサイクルできる紙製の弁当容器です。早稲田大学では当たり前のように使われており、全国に広がりつつあります。また、湘南の海岸清掃をする湘南レレ隊、屋久島エコツアー、打ち水、環境ビジネスなどの多様な企画を展開しています。



打ち水大作戦



弁当容器「ホッかる」



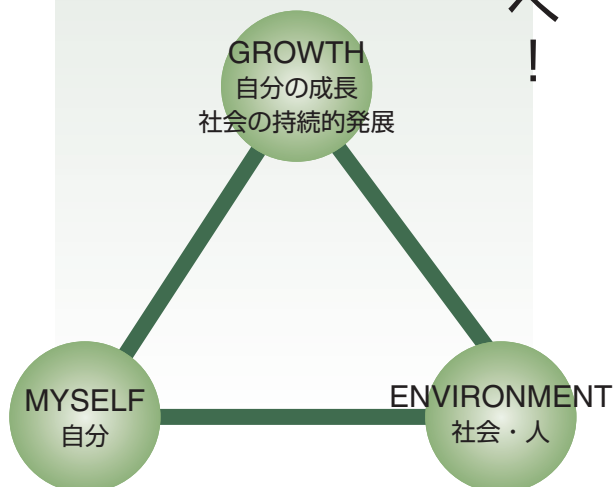
早稲田大学ボランティアセンターは、ボランティア活動を通じ、大学の教育・研究資産の社会への還元を活動の目的のひとつとしています。現在進行中のプロジェクト数は約30。そのひとつに環境ボランティア学校があります。

環境ボランティア学校は「入学は環境ボランティアに興味があった日、やりたいことがみつけれたら卒業」を基本コンセプトに2003年に始動しました。

「環境によいことやみんなのためになることをしたい」という熱意が結実した企画はこれまでに24回を数えます。

環境ボランティア学校への参加がきっかけとなって、学生が環境問題に興味を持ち、自主的に学び、調べ、活動し、やがて環境問題が少しずつ解決していけば…そのような思いを込めて企画をたてています。

ボランティアセンターの枠組み



環境保全活動十ボランティア十大学〓もつと未来へ！

■ 環境ボランティア学校2005-06年度の活動

【2005年度】

- 第14回：2005年4月9日：市民ビオトープ講演会
●地球環境パートナーシッププラザ
- 第15回：2005年5月24日：トイレの汚水はどこへ行く？
●落合水再生センター見学会
- 第16回：2005年6月28日：大学のごみはどこへ行く？
ペットボトルリサイクル工場見学会
●神奈川県川崎市
- 第17回：2005年7月16日：木と土にふれながら、
アフリカの砂漠化と植林活動を学ぼう
～森と生きるワークショップ
●「サヘルの森」活動地（横浜市）
- 第18回：2005年10月15日：
「ヤップ島での自然プログラム」報告会
●早稲田大学
- 第19回：2005年11月19日：
「ヨーロッパ・モルドバ共和国視察報告会」
●早稲田大学
- 第20回：2005年12月15日16日17日：
「エコプロダクツへ行こう！」
●東京ビックサイト

【2006年度】

- 第21回：2006年4月15日：講演会
「環境問題から見てくる、新しい社会のつくり方」
- 第22回：2006年5月20～21日：
「益子町環境基本計画リーディングプロジェクト(第1回)」
●栃木県益子町
- 第23回：2006年6月23日：大学のごみはどこへ行く？
ごみ中間処分場東雲リサイクルセンター見学会
●東京都江東区
- 第24回：2006年7月～2日：
「益子町環境基本計画リーディングプロジェクト(第2回)」
●栃木県益子町





エコフューチャー学生教職員懇談会

学生と教職員が環境問題について語り合う場が、「エコフューチャー学生教職員懇談会」です。2000年に開始され、以後年に1回のペースで開催しています。

地球規模の環境問題から、大学のごみ箱まで、話し合われる話題は様々です。

この話し合いから、改善活動に発展することもあります。

例えば、もっと紙を分別しやすくごみ箱を整備して欲しいという要望により、屋外用の紙類リサイクルボックスを設置しました。また、「環境ボランティア学校」の大学のごみはどこへ行く？連続企画は、大学のごみがどうやって処理されるか知りたいという意見から始まりました。最近では「理想のごみ箱はどんなものだろう？」という問いかけが「早稲田オリジナルごみ箱開発プロジェクト」として結実しました。

これからも「未来の種」がこの懇談会から出てくるでしょう。



エコフューチャー学生教職員懇談会の様子



学生の声で実現した紙類リサイクルボックス



地域と共に

早稲田大学を初めて訪れた方は、大学が街と浑然一体となっている様子に驚かれます。そんな早稲田界隈の雰囲気は長い歴史の中で培われてきました。

学生は喫茶店や食堂で仲間たちと語り合い、店の人たちは、そんな学生を時には見守り、時には教え導いてくれます。早稲田の街全体が教室ともいえるでしょう。

西早稲田キャンパスで開催される地球感謝祭は、商店街が主催する環境や防災をテーマとしたイベントです。

また、新宿区で環境保全活動を行っている企業等の情報交換の場である「エコ事業者連絡会」に早稲田大学は積極的に参加しています。



環境関連授業

- 早稲田大学には18の大学院と11の学部があり、それぞれに環境に関する科目があります。
科目名に「環境」と付くものだけでも400科目以上あります。
- そのうち、全学部の学生が履修可能なオープン教育科目からのみ、環境関連科目を抽出しました。
各学部・大学院の科目は含まれていません。

環境関連科目一覧

NPO実践論	オープン教育センター
ボランティア論	//
環境とボランティア	//
持続可能な社会と市民の役割(ミクロネシアの島と日本の農村から見る「豊かさ」の体験的考察)	//
国際交流と社会貢献	//
都市と農村関係論	//
農山村体験実習-農林業問題入門-	//
富士山環境再生実践講座	//
環境システム学	//
環境関連施設見学実習	//
実験と映像で探る自然-体験学習で自然科学の世界へ-	//
中国持続可能な発展その現在と未来	//
中国農村研究入門	//
環境とアート	//
環境における科学と技術：エジプト文明の形成	//
環境における科学と技術：地中海世界とエジプト	//
都市環境法・都市生活型公害を克服する法システム	//
身体と環境	//
バリ島と南太平洋の島々-環境と島民の生活-	//
地球からの贈り物、宝石と鉱物の魅力を探る（基礎編）（応用編）	//
環境と考古学 1・2	文学部提供オープン科目
地理学 A・B	教育学部提供オープン科目
地球システムと環境問題	//
地球生物学（地球環境と生物の歴史）	//
環境の生物学	//
地球と生命および人類の歴史と環境	//
地球システム総論	//
地球環境の変遷と生物の絶滅	//
環境法	社会科学部提供オープン科目
環境情報科学	人間科学部提供オープン科目
地球環境システム論	//
環境心理学	//
環境民俗学	//
環境社会学	//

環境関連教員・研究

●環境に関わりの深い研究を行っている教員のリスト(2006年6月現在)です。

これ以外にも環境問題に関連した研究が行われています。



教員名	専門分野・主な研究課題
赤尾 健一	経済理論、林学
天野 正博	地球温暖化と森林の役割
太田 俊二	地球温暖化、環境動態変化、森林
大塚 直	民法、環境法
大野 高裕	北九州市エコマナー導入による環境配慮行動促進システムに関する研究、自動回収機（RVM）を用いたリサイクルシステムの開発
大和田 秀二	リサイクル工学、地球・資源システム工学
尾島 俊雄	低環境負荷・資源循環型居住システム、地域省エネルギー計画立案支援手法
小川 誠	岩石・鉱物・鉱床学、環境浄化材料の設計
勝田 正文	燃料電池、資源環境問題に調和した熱・エネルギーシステム
北山 雅昭	民事法学・環境法
久保 純子	自然地理学、地形学、第四紀学、メコン川下流（カンボジア）の地形と洪水災害に関する研究
栗山 浩一	環境経済学、生態系影響評価
黒川 哲志	環境保全、環境法
齋藤 潔	省エネルギー、環境配慮型空調システム
榊原 豊	水環境工学、水質工学、環境修復
櫻井 英博	植物生理学、植物生理生化学、環境科学、再生可能エネルギー
杉山 雅洋	交通経済学、交通政策
首藤 重幸	環境法における市民参加、環境行政
早田 宰	都市計画、都市再生、居住環境整備計画
大聖 泰弘	自動車の環境技術、自動車交通と環境・エネルギー問題
高田 祥三	ライフサイクルマネジメント
田邊 新一	室内環境、環境共生建築
田村 正勝	温暖化対策-排出権取引・森林保全・稲作、地球温暖化対策、環境権と自然哲学
常田 聡	生活廃水の生物処理、生物膜内の微生物生態系の解明
坪郷 實	環境政策
寺島 信義	環境情報学
長沢 伸也	環境影響評価、環境政策、感性工学
永田 勝也	エネルギー環境工学、リサイクル工学
中村 慎一郎	経済理論、計量経済学、廃棄物経済学
名古屋 俊士	環境安全工学、作業環境工学、大気環境工学
原 剛	環境ジャーナリズム
御子柴 善之	環境倫理学
村山 武彦	環境影響評価、社会システム工学、環境保全、社会工学、リスク管理論
森川 靖	森林の保全、森林の二酸化炭素吸収と温暖化
寄本 勝美	廃棄物行政、リサイクル社会、環境行政



地球環境問題談話会

学内外の環境関連の研究や活動を行っている方を講演者として招き、学問的な見地から環境問題に関する知識を深めることを目的としています。

質疑応答の時間には、和やかな雰囲気の中にも、参加者の環境への強い関心が伺えます。

各分野で活躍する講演者の最新の話題に触れ、気軽に質問を交わせる談話会は、早稲田大学ならではの貴重な場といえます。

2005年度から2006年度にかけては、次のテーマで談話会を開催しました。

【2005年度】

第35回 2005年6月30日

製品ライフサイクルの設計と評価

早稲田大学理工学術院教授 高田祥三

第36回 2005年12月7日

残土・産廃問題とたたかう市民運動

「残土・産廃問題ネットワーク・ちば」

事務局長 井村弘子

【2006年度】

第37回 2006年6月13日

環境保全、その奇跡と生態

早稲田大学環境総合研究センター教授、

前環境省水環境部長 吉田徳久



地球環境問題談話会の様子



キャンパスと自然

所沢キャンパスは、首都圏でも有数の自然環境に恵まれた狭山丘陵の一角にあります。この豊かな自然環境を生かしながらキャンパスを造るため、1987年に自然環境調査室を設置しました。設置以来、キャンパスの自然環境保全のために活動しています。

また、1998年には「人間科学部環境保全基本構想」を策定し、所沢キャンパスでのごみの分別・再生紙の利用・太陽光の利用・残飯の堆肥化など、総合的な環境保全の推進を行っています。

本庄キャンパスにおいても豊かな自然を保全しています。2007年4月には環境を主たるテーマとする大学院「環境・エネルギー研究科」を開設します。

さらに新宿区にある西早稲田・戸山・大久保の3キャンパスでは、都心では少なくなりつつある豊かな緑を維持し、学生・教職員だけでなく近隣の方々の憩いの場となっています。近年では屋上緑化・壁面緑化を積極的に行っています。



所沢キャンパスの湿地保全

化学物質管理

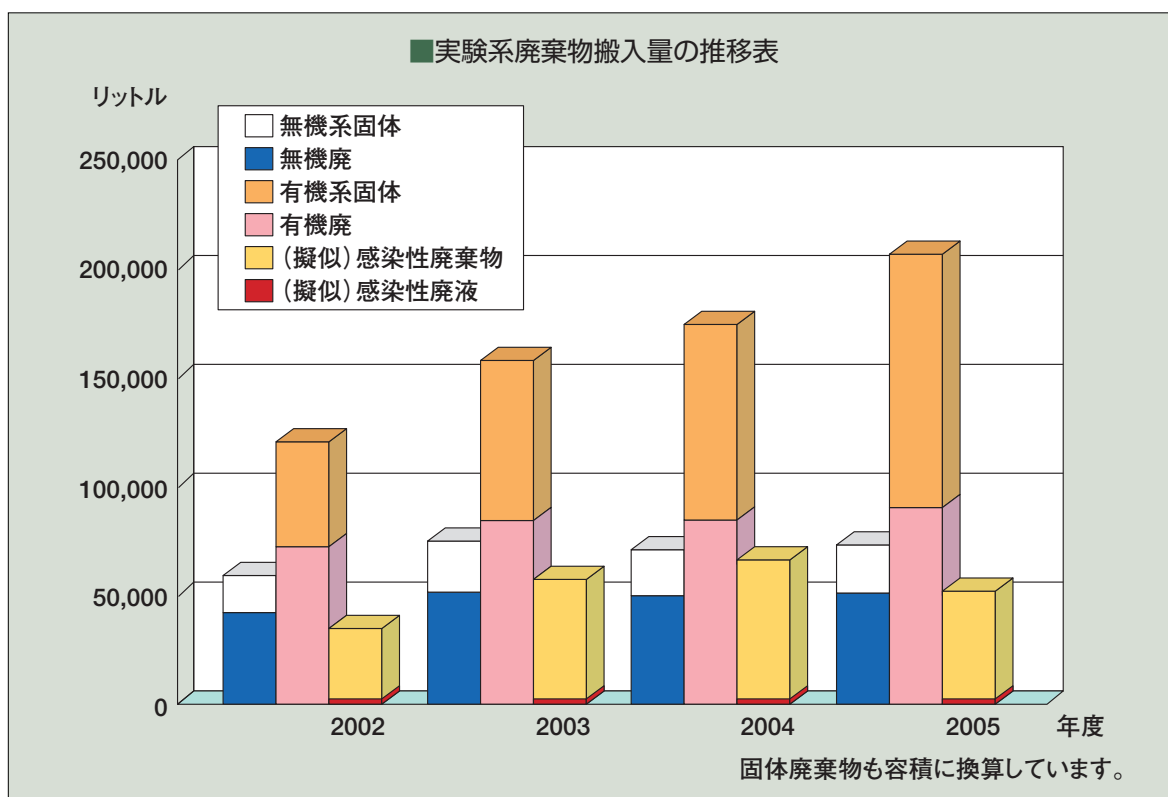
早稲田大学では研究・教育活動において多種多様な化学物質を使用します。それらの化学物質の中には人の健康や生態系に有害なものも多く、使用や廃棄にあたっては注意を要します。

研究・教育活動に伴い発生する実験系廃棄物は、その廃棄物の性状に合わせて分別回収がおこなわれ、学外の専門業者に委託して適切な廃棄処理をおこなっています。

特に大久保キャンパスでは化学物質を使用する理工系の研究室・実験室が集中しており、1つ1つの研究室・実験室の使用量はそれほどではなくても、キャンパス全体でみた場合、非常に多くの化学物質が使用されています。

大学では「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律（PRTR制度）」により指定された化学物質のうち、年間使用量が1トンを超えたものの国への届出を行っております。

2005年度の届出はクロロホルム、塩化メチレン（ジクロロメタン）、トルエンの3物質が対象となりました。



■2005年度PRTR制度対象化学物質の届出（学内では大久保キャンパスのみが該当しました）

対象化学物質	使用量(Kg)	大気への排出量(Kg)	下水道への移動量(Kg)	事業所外への移動量(Kg)
クロロホルム	9,000	1,800	11	7,200
塩化メチレン	4,400	900	6	3,500
トルエン	1,500	500	0	1,000

PRTR（Pollutant Release and Transfer Register）制度とは、人の健康や生態系に有害なおそれのある化学物質について、事業所からの環境（大気、水域、土壌）への排出量及び廃棄物に含まれての事業所外への移動量を事業者が自ら把握し国に対して届け出るとともに、国は届出データや推計に基づき、排出量・移動量を集計し、公表する制度です。この制度の対象となる化学物質は第一種化学物質として指定された354物質です。届出の対象となる事業者は第一種化学物質の年間取扱量が1トン以上の事業所を有するものとされています。

水質管理 (理工系実験排水の定期的水質分析)

科学技術に関する研究・教育を行っている施設（特定施設）から主に下水道へ流される排水について、早稲田大学環境保全センターで毎月定期的にpH、鉛などの重金属、揮発性有機化合物（VOC）等の項目の調査を実施しています。対象となる7キャンパス計23の採水箇所における分析の結果、除害施設へ流入する手前の調査地点でVOCの濃度が排水基準をやや超えていた箇所があったものの、下水排除基準に適合しないような排水の流出はありませんでした。また下水道局による立入水質調査も頻繁に行われており、良好な水質の維持管理がなされています。



地球温暖化低減、省エネルギーに関する取り組み

早稲田大学は、東京都が実施する「地球温暖化対策計画書制度」に基づいて、温室効果ガス排出削減に向けて、省エネルギー化および環境負荷の低いエネルギーへの転換に努めています。その取り組みは、西早稲田と大久保キャンパスが最高ランクのAAの評価を、戸山キャンパスがA+の評価を得ています。主に以下のような取り組みを行っています。

- 冬場の熱源を、重油ボイラーから空調機器に順次変更して、CO₂排出量の多い重油の使用を削減します。
- エアコンや蛍光灯を効率の高い機器に順次更新して、エネルギー消費量を削減します。
- トイレなどに自動水栓装置、擬音装置を設置して水使用量を削減します。
- 省エネ法に基づく「管理標準」に従って空調設備やボイラー設備を運用し、効率的なエネルギー使用に努めています。

2009年度までの長期計画に基づいて2005・2006年度は、上記取り組みを段階的に進めました。

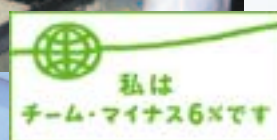
なお、早稲田大学はチーム・マイナス6%に参加し、全学的に地球温暖化低減に取り組んでいます。

目標とするCO₂削減率

キャンパス名	CO ₂ 削減率(%)
西早稲田キャンパス	10.32
戸山キャンパス	5.13
大久保キャンパス	7.02

※2002年度～2004年度の3年間のCO₂排出量の平均値を基準とした。

※2002年度～2009年度の期間での取り組みによって、上記CO₂削減率の達成を目指すこととした。



環境宣言

早稲田大学では環境宣言を策定し、全学的に環境保全活動を推進しています。



早稲田大学環境宣言



早稲田大学は、グローバルな視野とローカルな魂を持つ地球市民の育成と地球規模の課題に対する組織的な取り組みによる人類の未来への貢献という、21世紀にふさわしい大学づくりをめざしている。

そして、早稲田大学は、「地球環境の保全」という地球規模の課題に対し、教育研究をはじめとするあらゆる活動を通じて、社会の一員として先見性と積極的な姿勢をもって取り組む責務があることを認識する。

そこで、早稲田大学は、さまざまな局面において展開されている環境負荷の低減や循環型社会の実現に寄与する活動を統合して、環境マネジメントシステムを構築し、次の活動を積極的に推進する。

1. 早稲田大学は、地球環境の保全を課題とする教育、研究の推進を図り、人類に貢献する人材の育成および環境分野の研究の進展を期する。
2. 早稲田大学は、環境にかかわる教育、研究の成果を踏まえて、地域社会をはじめとするあらゆる人々に対する教育、啓発、普及活動を積極的に展開する。
3. 早稲田大学は、教育研究をはじめとするあらゆる活動が環境に及ぼす影響を常に認識し、地球環境に配慮した「エコ・キャンパス」の実現をめざして、継続的に改善を図るとともに、環境汚染の予防に努める。
4. 早稲田大学は、教育研究をはじめとするあらゆる活動において、環境に関連する法規、規制、協定、学内規定等を遵守する。
5. 早稲田大学は、教育研究をはじめとするあらゆる活動が環境に及ぼす影響を調査、分析し、環境目的および環境目標を定めてその実現を図り、定期的に見直しをする。
6. 早稲田大学は、教育研究をはじめとするあらゆる活動において、地球温暖化低減策の推進、グリーン購入の推進、エネルギー使用量の削減、廃棄物発生量の削減、資源のリサイクルの向上に努める。
7. 早稲田大学は、あらゆる人々に環境方針を公開し、「地球環境の保全」の取り組みに対して、理解と協力を求める。
8. 早稲田大学は、大学全体で環境マネジメントシステムを運用し、継続的な改善を図るとともに、学生、教職員および早稲田大学にかかわる人々にその全容を周知する。

1999年11月26日制定

2006年7月1日第8項下線部を改訂

学校法人 早稲田大学

環境マネジメントシステム-WEMS(早稲田大学環境マネジメントシステム)

●環境マネジメントシステムの拡大

早稲田大学では2000年6月西早稲田キャンパスにおいてISO14001の認証を取得しました。このシステムにより2000年から2005年までの6年間、環境保全活動を行ってきましたが、2006年7月より環境マネジメントシステムを刷新すると共に運用範囲を学校法人早稲田大学全体に拡大しました。

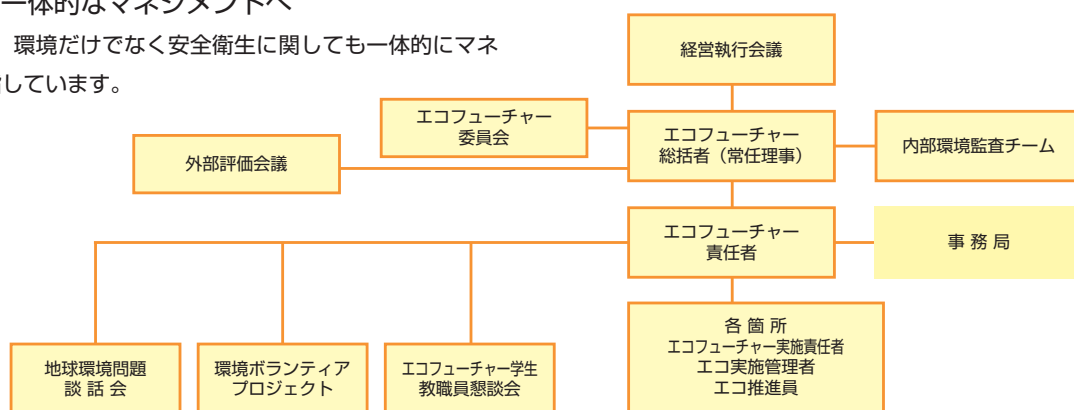
●第三者認証について

2006年7月から運用している早稲田大学環境マネジメントシステム(Waseda University Environmental Management System: 略称WEMS:ダブルユー・エム・エス)はISO14001規格に準じ作成していますが、第三者認証は取得していません。

●環境と安全衛生の一体的なマネジメントへ

今後WEMSにおいて、環境だけでなく安全衛生に関しても一体的にマネジメントすることを目指しています。

■実施体制



■2005年度環境目標と達成状況 (西早稲田キャンパスのみ)

カテゴリー	2005年度目標	達成状況
教育の普及活動	環境ボランティアの教育普及活動実施	○
教育、研究の推進	環境総合研究センターの研究活動支援、講演会・シンポジウム開催、学生とのコミュニケーション	△
グリーン購入の推進	古紙配合率 100%、白色度 70%用紙の優先使用	△
廃棄物発生量の削減	建物新築を考慮し、2001年度の4%増の935.8tに抑制	○
資源のリサイクル	年間廃棄物総量に対する再資源化物量の割合を65%にする	×
地球温暖化低減策の推進	地球温暖化物質(二酸化炭素換算)の延床面積1㎡あたりの排出量を、建物新築を考慮し、2001年度比4.7%増の58.59kgとする	○
エネルギー使用量の削減	ガス使用量を、建物新築を考慮し、2001年度比82%増の578,221㎡に抑制	○
	水使用量を、建物新築を考慮し、2001年度比7%増の127,545㎡に抑制	○
	重油使用量を2000年度比48.8%減の272kl以下に	×
	電力使用量を、建物新築を考慮し、2001年度比20%増の22,476,654kwhに抑制	○

○:目標達成 △:一部目標未達成 ×:目標達成できず

■近年の早稲田大学の主な建物建設状況

1998年3月～
2001年7月～
2005年2月～
2006年3月～
2008年度以降

- 西早稲田キャンパス 14号館
- 戸山キャンパス学生会館
- 西早稲田キャンパス 8号館 ●小野梓記念館
- 大隈記念タワー
- 西早稲田キャンパスC棟 ●大久保キャンパス 63号館 ●河田町キャンパス(仮称)施設

■2006年度環境目標 (学校法人早稲田大学全体)

カテゴリー	2006年度目標
学生の環境意識の向上と環境保全活動への参加	「化学物質取扱における環境保全・安全説明会」手法の改善、地球環境問題談話会等のシンポジウム開催、環境ボランティア学校開催、エコフューチャー学生教職員懇談会開催
教職員の環境保全意識の向上	研修会・エコミーティング等の開催
安心・安全な学内環境の整備	アスベスト撤去計画の実行、シックハウス対象物質の監視、PCBの適正管理および早期の処理、分煙キャンパスの徹底
廃棄物の発生抑制、リサイクルの推進、循環型社会への貢献	廃棄物発生量 2,280t(2005年度比 0.5%減)、リサイクル率 47%(2005年度比1ポイントアップ)、化学物質使用量削減策検討、化学物質の適正保管・管理、事務所等でのグリーン購入の徹底
地球温暖化物質排出抑制、省エネルギー等	電力使用量76,538,680kwh(2005年度比 -1.5%)
	ガス使用量2,524,951㎡(2005年度比 +2.6%)(注1)
	水の使用量659,761㎡(2005年度比 -2.4%)
	重油使用量1,137kl(2005年度比 +1.3%)
地球温暖化物質排出量(二酸化炭素換算)の目標値: 39,005t(2005年度比 -0.9%減)	被緑率計画の策定

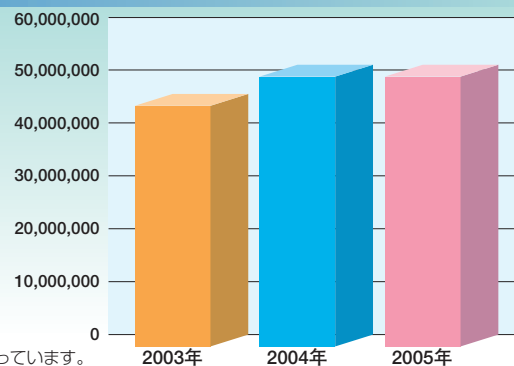
(注1)ボイラーを廃止し、ガス空調機への転換をすすめるため、ガス使用量は増加します。

温室効果ガス排出量

	2003	2004	2005
大学全体の合計	45,603,943	51,046,554	52,721,097

(kg)

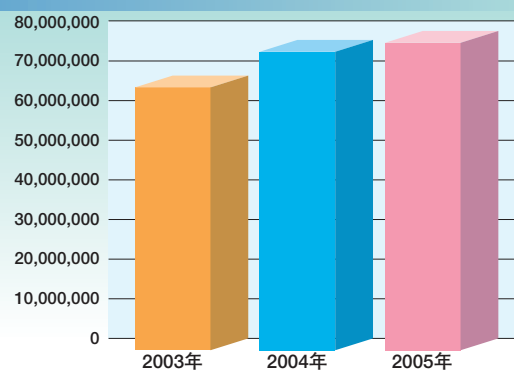
温室効果ガス排出量はCO₂換算値です。
温室効果ガスの換算係数は東京都「地球温暖化計画書制度」の数値によっています。



電気使用量

	2003	2004	2005
大学全体の合計	66,233,836	75,314,486	77,574,154

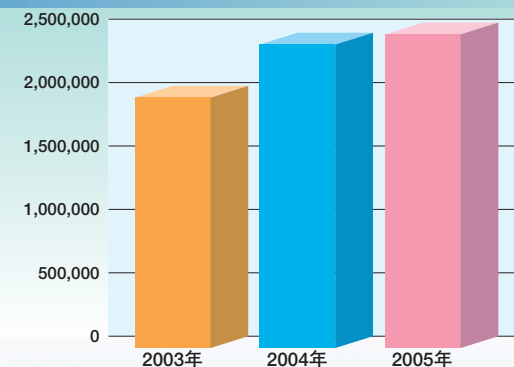
(kwh)



ガス使用量

	2003	2004	2005
大学全体の合計	1,999,628	2,394,374	2,474,206

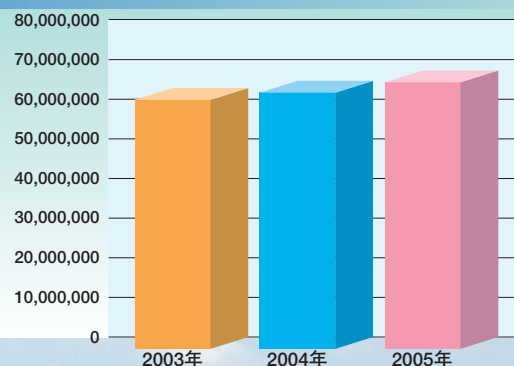
(m³)



水道使用量

	2003	2004	2005
大学全体の合計	638,074	656,172	676,135

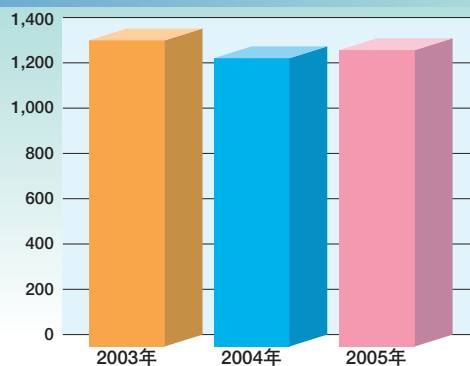
(m³)



重油 使用量

	2003	2004	2005
大学全体の 合 計	1,381	1,186	1,268

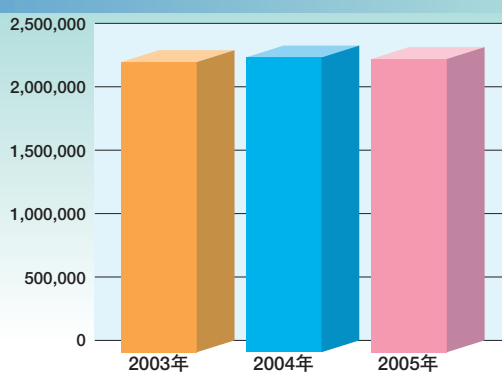
(kℓ)



廃棄物 発生量 重量ベース

	2003	2004	2005
大学全体の 合 計	2,309,800	2,331,508	2,318,657

(kg)

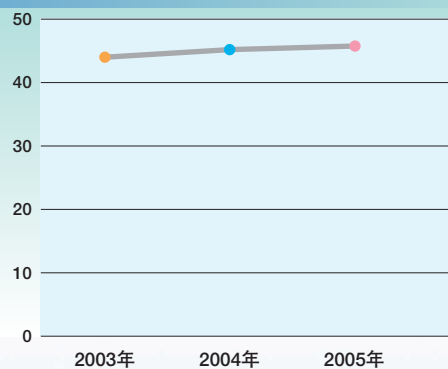


廃棄物発生量はごみ箱に投入されたすべての物品の重量です。

リサイクル 率

	2003	2004	2005
大学全体の 合 計	44.0	45.0	45.7

(%)



リサイクル率=リサイクルされた物品の重量/ごみ箱に投入されたすべての物品の重量×100

環境保全活動の歩み

年 度	取 り 組 み
1979	環境保全センターの設置
1992	廃棄物問題検討委員会の設置
1996	財政改革推進本部の設置
1997	地球環境問題懇話会の発足
1998	人間科学部「人間科学部環境保全基本構想」の発表
1998	エコ・キャンパス推進本部の設置と東京都との協働
1999	環境問題連続講演会の開催
2000	西早稲田キャンパスでISO14001認証取得
2002	環境総合研究センターを新設
2003	ボランティアセンターに「環境ボランティア学校」開設
2003	西早稲田キャンパスでISO14001認証更新
2003	総務部に環境安全管理課を新設
2005/4	理工学研究科環境・エネルギー専攻開設
2005/4	環境に配慮した新8号館竣工
2005/4	Eco Campus Fact Sheet 2005発行
2005/4	第14回環境ボランティア学校開催 市民ビオトープ講演会
2005/5	第15回環境ボランティア学校開催 トイレの汚水はどこへ行く?-落水水再生センター見学-
2005/6	第35回地球温暖化環境問題談話会開催 演題:「製品ライフサイクルの設計と評価」 講師:高田祥三(理工学術院教授)
2005/6	早稲田大学緑化中間報告発表
2005/6	第16回環境ボランティア学校開催 「大学のごみはどこへ行く?ペットボトルリサイクル工場見学会」
2005/7	第17回環境ボランティア学校開催 「木と土にふれながら、アフリカの砂漠化と植林活動を学ぼう!!」
2005/7	シックハウス対策を実施
2005/7	打ち水大作戦 in 早稲田大学
2005/8	エコ・キャンパス学生教職員懇談会開催
2005/10	リユース弁当箱プロジェクト始動
2005/10	アスベスト対策の実施
2005/10	第18回環境ボランティア学校開催 「ヤップ島での自然プログラム」報告会
2005/11	第19回環境ボランティア学校開催 「ヨーロッパ・モルドバ共和国視察報告会」
2005/12	第36回地球温暖化環境問題談話会開催 演題:「残土・産廃問題とたたかう市民運動」 講師:井村弘子(残土・産廃問題ネットワーク・千葉事務局長)
2005/12	第20回環境ボランティア学校開催 「エコプロダクツへ行こう」
2006/2	ワンガリ・マータイ氏に名誉博士号を贈呈
2006/7	早稲田大学環境マネジメントシステム(WEMS)を全学に展開

環境に関するコミュニケーション

■ 苦情・質問・件数

	苦情	その他	総件数
2005年度	2	26	28
2006年度	0	6	6

2005年4月～2006年7月まで

●主な苦情内容

早稲田大学学生から、夏季空調の室内設定温度について、室温が暑すぎるとの苦情
近隣住民から、キャンパス内の喫煙場所が近隣に及ぼす影響について

●主な質問・取材内容

他大学学生から、環境への取り組み・環境報告書に関する取材及びアンケート
早稲田大学学生から、光熱水費データのについての問い合わせ



早稲田大学の安全への取組み

吹付けアスベスト対策

早稲田大学では、アスベストが原因とされる疾患が問題視された1988年から1990年にかけて、それ以前に天井部分に使用された吹付けアスベストについて封じ込めによる空気中への飛散防止工事を施しました。それによりアスベストの飛散を封じ込めてきました。

2005年度には、アスベストの危険性が社会問題と化している昨今の状況に鑑みて、吹付けアスベストの封じ込め状態を再確認し、同時に、建物の室内空気中のアスベスト濃度の測定を実施しました。調査の結果、すべての箇所でアスベストの飛散が認められない安定状態であることが確認され、測定値も外気と同程度でした。

2006年度には吹付けアスベストの一部撤去を実施し、その他の既存吹付けアスベストについては状況の点検を行い、安全性の確認を行いました。来年度以降も、2年間を目標に段階的に撤去工事を実施していきます（停電などの影響により撤去が困難な電気室等については、より長期の撤去計画を立てています）。また、撤去するまでの期間は、毎年定期的に点検を行い、安全性を確保していきます。

2006年度吹付けアスベスト撤去箇所

キャンパス名	号 館
西早稲田キャンパス	7号館
	9号館
	12号館（建物の解体に伴って撤去）
	16号館（一部） 大隈講堂
戸山キャンパス	33号館
大久保キャンパス	59号館（一部）
高 等 学 院	70号館（一部）
	74—4号館

シックハウス対策

建物の高気密化や化学物質を放散する建材の使用などにより、室内空気中に含まれる化学物質の量が増加し、新築・改修した建築物の利用者が体調不良を起こす、シックハウス症候群が問題となっています。

早稲田大学では、大学の施設を利用する方々にそのような症状が出ないように、主に以下の取り組みを行っています。

- 新しく建物を建てる際には、化学物質の放散量の少ない建材を使用しています。
- 適正な換気量が確保された設計としています。
- 新築や改修を行った箇所を中心に室内空気測定を継続的に実施し、「学校環境衛生の基準（文部科学省）」で定める室内濃度指針値を下回っているかどうかをチェックしています。

2005、2006年度には、新築された西早稲田キャンパス8号館・小野梓記念館・大隈記念タワーの3棟をはじめ、改修したキャリアセンター・国際コミュニティセンター・早稲田ポータルオフィスなどの室内空気測定を、早稲田大学環境保全センター及び外部測定業者において実施しました。

■ 学校環境衛生の基準で定める化学物質

化学物質名	主な発生源	指針値(μg/m ³)
ホルムアルデヒド	合板、接着剤、防腐剤	100
トルエン	接着剤、塗料の溶剤・希釈剤	260
キシレン	接着剤、塗料の溶剤・希釈剤、油性ペイント	870
エチルベンゼン	接着剤、塗料の溶剤・希釈剤	3800
スチレン	接着剤、断熱材、畳心材	220
パラジクロロベンゼン	防虫剤、芳香剤、消臭剤	240

■ 近年の早稲田大学の主な建物建設状況

1998年3月～	西早稲田キャンパス14号館
2001年7月～	戸山キャンパス学生会館
2005年2月～	西早稲田キャンパス8号館
	小野梓記念館
2006年3月～	大隈記念タワー
2008年度以降	西早稲田キャンパスC棟
	大久保キャンパス63号館
	河田町キャンパス（仮称）施設



8号館の室内空気測定の様子

化学物質の安全管理

早稲田大学では、理工学部のある大久保キャンパスをはじめとして、西早稲田キャンパス、研究開発センター、所沢キャンパス、本庄キャンパスなど、さまざまな箇所では薬品や高圧ガスなどの化学物質を使用しています。化学物質はあやまった使い方をすると、爆発や火災など、非常に危険な状況をとまなう恐れがあります。早稲田大学は安全に対する法令を順守し、社会に対して責任を果たすための体制を整えているところです。そのために、大学で使用する薬品・高圧ガスにバーコードを貼り付け、Webによって化学物質の出入りを管理する全学共通の化学物質管理システム（CRIS Ver1.0）を2005年度に構築しました。これによって、各研究室・実験室から自室の在庫薬品をWebで閲覧することが可能となり、また万が一、火災が発生した場合にも、出火場所の在庫薬品情報を、出火後数分以内に消防署等に伝える体制を整備することができました。2006年度には、システムの在庫薬品情報と実際の在庫薬品とを照合し、その結果をデータに反映させて、データ精度を高めました。

今後も、安全に関する講義・講習会を充実させ、より安全な研究・実験環境を整えるなど、ソフト・ハード両面において安全な化学物質管理を推進していきます。



化学物質管理システムメニュー画面

実験系の安全管理

早稲田大学では、2006年度に研究活動中の事故が数件発生しました。早稲田大学はこのことを重く受けとめ、大久保キャンパスを中心に「教育研究活動における安全の確保」を重要課題とし、事故を未然に防ぐための様々な取り組みを行っています。

また不本意ながら事故が発生してしまった場合には、被害を最小限にとどめる事はもとより、その事故から最大限の再発防止策を学びとり、より安全な実験環境の構築に注力しています。

このような観点から毎年、研究活動を展開する上で順守しなければならないルールを、近年の事故事例などを踏まえながら解説する「安全のてびき」を発行し、卒・修論生を対象とした「安全講習会」等を通して啓発を行っています。

また、日々の研究活動を、安全という観点からサポートするために、技術系職員を中心とした「安全サポートグループ」を組織し、学生・教職員と積極的なコミュニケーションをとりながら、最も良好な対応策の検討・提案、および具体的な施策を行っています。

早稲田大学は事故ゼロを目指し、最善を尽くして参ります。



PCBの管理

PCB「ポリ塩化ビフェニル」は、かつて、コンデンサや安定器といった電気機器に一般的に使用されていた物質で、毒性があります。

早稲田大学には伝統ある建物が多く、それらの照明機器等にPCBが使用されていたものがありました。しかし現在はすべて交換し、法令に従い適切に保管しています。

2006年度からPCBの廃棄処理が可能となり、早稲田大学ではできる限り早期にPCBを処理すべく計画しています。



学内各所に設置されたAED



防火・救命の体制

学業に専念し、研究に打ち込むためにも、安全・安心なキャンパスは最低限必要なものと早稲田大学は考えます。

その安全・安心なキャンパスを維持するため、職員は自衛消防隊を組織し、万が一火災が発生した場合には初期消火できる体制をとっています。

また、キャンパス内で急病人が出た場合、応急手当ができるよう消防署による救命救急講習を受講し心臓マッサージや応急手当のスキルを身につけています。

2006年度は早稲田大学総合健康教育センターによりAEDを学内に整備しました。

AED設置箇所一覧

キャンパス名	設置箇所名
西早稲田	総健センター西早稲田キャンパス（25-2号館） 17号館体育館（B1F、2F） 正門受付、北門受付
大久保	総健センター大久保分室（51号館1階） 正門受付
所沢	総健センター所沢分室（100号館3階） 正門受付
本庄	総健センター本庄分室（93号館1階） 本庄高等学院（保健室）
戸山	正門受付 記念会堂 第2体育館 総健センター戸山分室（33号館1階） 高石記念プール 競技スポーツセンター事務所（体育・シーズン実技用） 学生会館B2F トレーニングセンター
東伏見	東伏見 体育館ホール 硬式庭球場 硬式・軟式野球場 教室棟（事務所）
上井草	上井草ラグビー部合宿所
上石神井	高等学院（保健室）
戸田	戸田漕艇部合宿所
北九州	情報生産システム研究科事務所
セミナーハウス	軽井沢・菅平・松代・伊豆川奈・鴨川
健保直営保養所	逗子海の家

地震対策

早稲田大学は関東大震災の折、学生・教職員が力を合わせて、火災から大学を守った歴史があります。また、震災救護団を組織し、近隣の罹災者の救護も行いました。

その伝統は現在まで受け継がれています。早稲田大学では、震度6弱以上の地震が起きた場合、人的・物的被害を最小限にし、早期に大学運営を復旧するため総合的な地震対策を行ってきました。

大地震対応マニュアル作成、各キャンパスへの備蓄庫の設置、建物の耐震診断と補強、防災訓練の実施などはその一例です。

2005年度から2006年度にかけては、帰宅困難者対策と地震発生直後の教職員の対応手順のシミュレーションに重点を置き活動しました。

また、早稲田大学は各自治体と避難所の協定を締結し、大地震発生時、避難する近隣住民のみなさまを受け入れる体制を整備しています。



大地震対応マニュアル(学生用)



防災備蓄庫

■ キャンパスセキュリティ

早稲田大学は歴史的に「門のない大学」でした。誰にも開かれており、しかも大学と町とが渾然一体となった雰囲気、自由な学風の醸成とワセダらしい学生気質の形成に与えた影響は大きいといわれています。

現代の都心において、安全を損なわず開かれた大学を維持するために、早稲田大学はさまざまな試みを行っています。警備員を計画的に配置し、24時間体制で巡回、警備を行い、常時安全でしかも開放的なキャンパスを実現しています。

■ 安全衛生管理体制

早稲田大学では、労働安全衛生法の趣旨にかんがみ、災害の予防および労働・生活環境の整備向上に努め、教職員・学生の健康に配慮しています。そのために、安全衛生管理規程を設け、安全衛生委員会の設置について定めています。

また、2年に1度、夏季に安全衛生一斉点検を実施しています。キャンパスごとにおよそ1週間をかけ、事務所・教室・建物共有部分・建物外周・研究室・実験室等の点検を行っています。2006年度は安全衛生一斉点検の年にあたり、点検によって主に以下のことに取り組みました。

- 学内のほぼ100%の研究室内の点検を実施しました。
- 避難障害となる廊下物品の撤去を進めました。
- 実験を行う箇所における薬品・高圧ガス・X線の点検体制を整備し、実施しました。

■ 本学の安全衛生管理体制



ステークホルダーからのご意見

早稲田大学の環境保全活動に関してご意見をいただきました。
ご指摘をふまえ、活動の改善を行ってまいります。



環境活動のリーダーを目指せ

NPO法人エコプラス代表理事 高野孝子

早稲田大学の環境と安全に対する取り組みの姿勢から具体策を、すっきりとまとめて見せてくれる報告書になっている。

報告書の最初に学生の取り組みの紹介があり、現在進行形の生き生きとした活動であることが印象づけられる。ここで評価される点は、学生・教職員・地域・大学・企業などが連携していることで、開かれた取り組みとなっているのがわかる。報告書全体を通して、大学が地域に開かれたものであろうする姿勢が伝わってくる。

常任理事が要となってWEMSを進める「エコフューチャー」の実施体制も評価される。

報告書では、大学としての研究や教育だけでなく、一般への啓蒙や普及、コンプライアンスなど、地球環境問題に大学として取り組める事項が幅広く取り上げられているのもいい。

さらに期待したいことは、それぞれの深みだ。

例えば、環境関連の科目の紹介はあるが、「環境」とついていればすべて環境教育というわけではない。持続可能性という概念はすべての社会人、特にあらゆるレベルでリーダーになっていく人たちは身に付けていることが必要だ。全学生がもれなく、持続可能性について理解してから卒業するようなシステムは作れないだろうか。

学生の活動についても、もっと多岐に渡って報告できるように思われる。また5,500名近くいる教員のうち、環境関連の研究者リストは35名。研究や教育にも力を入れていく姿勢が見えるような方向を期待したい。

「自然環境調査室」について、もう少し詳しく1年の活動内容や担当者の声を取り上げることは、ステークホルダーの関心に沿うように思われる。早稲田

大学は、キャンパスの自然保全と開発との間で揺れてきた歴史があるのだから、どんなポリシーの元に何がどれだけ守られたのか、または守れなかったのか、現在の課題は何かなどもがっちり示してほしい。

本報告書以前にも「エコキャンパスファクトシート」などで、水やガス、電気、リサイクル率、廃棄物などのデータをしっかりと公表し、比較しているのはとても大切だ。

省エネもいいけれど、できれば攻めの姿勢で、削減目標値をもっと大胆にセットできないものだろうか。地球温暖化がこれほど話題になっている近年、他大学はもちろん、政府がびっくりするような削減を達成してほしい。グリーンエネルギーへの切り替え、もしくは段階的に増やしていくことも、社会や他の団体に影響を与える動きだと思う。

報告書の中に、ISO14001からWEMSに移行した理由を明記すると思う。また、環境に関するコミュニケーションの項では、苦情内容や質問などの説明はあるが、それにどう対応したかも示されるとなおいいと思う。

こうした報告書には「いいこと」が並びがちだけれど、課題をどれだけ認識しているかも評価の対象となる。それがあってこそ前に進めるのだから、言いにくいこと、できていないことも報告してはどうだろうか。

早稲田大学には環境政策と実行でも日本のリーダーであって欲しい。そうすれば、環境倫理意識の高い学生たちがさらに惹きつけられ、大学としてもさらに幅広く室の高い取り組みへとつながっていくと思う。

プロフィール

1963年新潟県生まれ。早稲田大学第一文学部（社会学）卒業、同大学院政治学修士、英ケンブリッジ大学「環境と開発」修士、英エジンバラ大学教育学博士（環境・野外教育）。ジャパントイムズ報道記者を経てフリーランス。二つの任意団体を立ち上げ、「人と自然と異文化」をテーマに体験を重視した、地球規模の環境・野外教育プロジェクトの企画運営を行っている。北極海横断やミクロネシアの孤島での活動などを環境教育の素材とするプログラムを展開。



大学と社会貢献

法政大学環境センター

山田佳男

品質や安全に対する関心がますます高まってきており、これに呼応するかのように民間企業では地域社会と連携し情報公開を積極的に行う動きが加速しています。こうした機会を捉えて情報発信していくことは、ネガティブな面を埋めるに留まらずむしろ競争社会における「勝ち組」への近道とも考えられています。企業は本来業務のなかで自組織の利潤のみならず地域社会や利害関係者の満足・安心感をいかに充足していくかという視点を取り入れ、アカウンタビリティ（説明責任）を果たしていくことが求められるところだと思います。

企業の社会貢献に対する推進体制を見ると、ISO14001認証取得に代表される環境マネジメントをはじめ、安全衛生、コンプライアンス、品質管理、情報管理、財務管理等々複数のマネジメントシステムがうまく機能しあいながら運営されているケースが多いようです。状況に応じてこれらのいくつかを統合して運営することも大切ですが、重要なことはひとつの体制をつくりあげたときにそれぞれが万全に機能するよう統括し継続的に監視できるしくみがあるかどうかだと思います。

大学は、教育と研究活動を行いその成果を社会に還元するために設置されています。企業の取り組みに習い、地域社会と密接に関係する「環境」や「安全衛生」等の要素を大学運営のなかに取り入れなければならないと思います。

早稲田大学は、これまで培ってこられた安全管理のシステムをさらに強化すると同時に、環境ISOを超えた運営体制を強化する新たな方向性を示されました。これは、大学の約7割を占める私立大学のトップランナーとして注目されるなか画期的な問題提起をなさったと思います。今後のご発展をご期待申し上げつつ、是非とも参考にさせていただきたいと思います。

法政大学でも「グリーン・ユニバーシティをめざして」というスローガンを掲げ、人間環境学部や大学院環境マネジメント研究科を新たに設置するなど教育研究活動を中心とした環境問題への取り組みを推進して参りました。様々な学生参加型のプログラムにおいては、千代田区役所や神楽坂商店街など近隣の皆様の暖かいご支援やご協力をいただきながら交流を深めてきました。また、その成果を環境報告書として発行し広く社会に対して環境に関する情報を積極的に発信しています。これからも教育の現場からできることを実践していきたいと思います。

国立大学の法人化の動きと重なってISO14001を認証取得する大学はついに50件を超えてきました（2007年1月現在）。これからの大学は、こうした動きをさらに加速しお互いに連携しながら「環境教育と研究」という大きな流れをもっと社会にアピールできたいと願っています。

プロフィール

法政大学環境センター職員

法政大学文学部卒業後、学校法人法政大学に就職。通信教育部、国際交流センター、総長室を経て現在に至る。

法政大学のEMSの構築、ISO14001認証取得を担当する。

●環境・安全報告書に関するご意見をお待ちしております。

E-mail: ecofuture@list.waseda.jp

●関連情報はホームページをご覧ください。

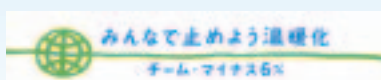
<http://www.waseda.jp/ecocampus/index.html>

発行日：2007年2月

発 行：早稲田大学エコフューチャー事務局

TEL:03-3204-9766 FAX:03-3203-7051 E-mail: ecofuture@list.waseda.jp

製 作：株式会社東京プレス



早稲田大学はチームマイナス6%に参加しています。



早稲田大学は環境マネジメントシステムを運用しています。

